

岸田劉生展に父の遺品を出品

古市俊郎さん

近代日本洋画史の巨匠、岸田劉生氏（明治24年〜昭和4年）の作品展「劉生と京都——『内なる美』を求めて」（11月30日まで）が京都市美術館で開かれている。同展に本紙「人生相談」の回答者でもある古市俊郎さん（51歳・金沢市・福之泉分教会長）が、かつて岸田劉生氏の内弟子だった父・巳能吉さんの遺品を出品。劉生研究の第一級資料として話題を呼んでいる。



古市俊郎さんが、京都市美術館で開かれた「劉生と京都——『内なる美』を求めて」の作品展に出品した父の遺品を展示している。左は父の自画像、右は劉生研究の第一級の資料として関心を集めている（8日、京都市美術館で）

描いた自画像を含む計8点の作品と、内弟子時代の日記2冊、さらに岸田氏からの手紙なども展示された。

美術館の篠雅廣学芸課長は「今回出品いただいた資料は、日本近代美術史を語る上で貴重な資料。劉生は長らく日記をつけていたが、京都時代に日記を中断した時期がある。巳能吉氏の日記によって、その空白の部分が見らくなった。展示会を開くに当たってさまざまな関連資料を探したが、巳能吉氏の資料を見た時は本当に驚いた」と。古市さんは「父は寡黙な人だったが、どれだけ劉生にあこがれ、絵に熱意を持っていたか。今回、日記を詳しく調べていた中で、あらためて知った。父が劉生の弟子となつて80年。そして父

出直しから38年を経て父

娘・麗子を描いた「童女舞姿」をはじめ数多くの傑作を遺した岸田劉生氏。今回の作品展は、東大震災で被災した氏が神奈川から京都に移り住み、大正12年から2年5か月余りを過ごした「京都時代」を紹介したもの。これまで、氏の京都時代に関する資料は極めて少なかつたが、このほ

ど、古市家に保管されていた巳能吉さんの日記や油絵などが明らかとなり、京都滞在中の様子を知る貴重な資料として評価された。明治38年に石川県で生まれた巳能吉さんは、地元の工業学校図案絵画科を卒業後、京都へ。試験を受けて岸田氏の内弟子となり、国際美術協会展

や春陽会展などで入選・入賞したが、氏の亡くなった後、石川へ帰郷した。その後、お道を信仰していた古市家の婿養子となり、昭和28年におさづけの理を拝戴。37年には修養科に入った。京都市美術館の開館70周年記念として開かれた今回の特別企画展には、巳能吉さんが独身時代に

の絵が世に出ることになり、息子として感慨深いものがある」と語った。（石川・山村社友情報提供）